## ● 読書感想文コンクール 小学校 4･5･6 学年 の部●

入選

水尾　春翔（みずお　はるか） 菅生学園初等学校 ４年生

作品名：がれきのなかで本当にあったことーわが子と語る東日本大震災ーを読んで
図　書：がれきのなかで本当にあったことーわが子と語る東日本大震災ー

今から三年半前、静まり返った町全体にアナウンスが響き渡りました。

「ピン・ポン・パン・ポーン。八王子市、及び東京電力からお知らせします。只今、計画停電を実施しています。停電中、信号機、街灯も点灯していません。自動車での移動は自粛すると共に、できる限り外出を控えてください。地域のみなさまは落ち着いて行動してください。

ピン・ポン・パン・ポーン。」

東日本大震災は、地震に津波の被害が重なり、さらに原発事故も起こり多くの尊い命が犠牲となった大惨事でした。大震災の直後、私達の住む町でも計画停電が実施されました。みんなで節電して、被災地が電力供給不足にならないように協力しました。

私が手にした本には、被災地で実際に起きた四十八の話が掲載されています。私はこの中で、今年七月にクリエイトホールで母と傾聴した高山幸夫さんが登場する「プロの誇り」の「日本の『救世主』ハイパーレスキュー隊」の章について講演の内容を交えながら感想を書きたいと思います。

この震災を受けて、東京消防庁ハイパーレスキュー隊は、福島第一原発で放水活動に従事されていました。作戦の決行は、高山幸夫総括隊長ら約四十人の隊員に委ねられました。事前訓練を荒川の河川敷で行い、ホースを伸ばして屈折放水塔車につないで、放水するオペレーションをくり返しました。海水を一分間に約三トンを送り出すホースは、五十メートルで約百キログラムもあります。それをロープで引っ張り四人がかりで運ぶのです。敷設は約三百五十メートルで足場は悪く、しかも見えない敵との戦いでした。

三月十九日未明、屈折放水塔車は、白煙を上げる三号機に向けて二十分間に約六十トンを放水しました。効率よく注水する一連の作業は、さすが消防士さんならではの活躍だったと思います。

しかし作業中は、危険・緊迫した異様な空気・爆発したらどうしようという不安の中、恐怖感でおしつぶされそうな時間を過ごされていたのだと察します。重い防護服を着用しながらも、警告音が鳴り響き強い放射線量を感じる時、一層恐怖心があおられたことでしょう。

任務を終えてからは前々都知事が「この国の運命を決めて下さった。これからも尊い仕事に邁進してもらいたい。みなさん、本当にありがとう。」と、涙声の御言葉を頂戴したそうです。今までの放水で一番嬉しく、現場を出た瞬間は何とも言えない達成感に浸り、これも勇敢な仲間と、オレンジ服のおかげだと高山さんは言います。まさしくオレンジ服のスーパーマン。総括隊長の重責を果たされた高山さんは、太陽よりも熱く正義感に満ち、力強いオーラを放っていました。「訓練に終わりなし。使命感に燃え、仕事に誇りを持つのが信条。」と、にっこり笑った横顔が印象的でした。

一方で、一家の主を送り出した御家族はどのようなお気持ちでいらしたのでしょうか。講演の最後に、母が「実際に福島へ現地入りする前、御家族の方とどのような会話をされたのですか。」と質問をしました。すると「全然、家に帰れていないのでメールをしました。女房には、絶対に家に帰るから心配するな。留守を頼む。」と伝え、奥様からは「待っています。」と返信があったとのことです。私は、信じて待つという御家族の方々の心の強さをとても素晴らしいと思いました。

天災は絶えることがありません。昨今、異常気象による被害が多発する中、自然の猛威を感じます。災害に対するあらゆる日頃の備えについて、家族で改めて考える機会に巡り合えたことに感謝します。